

終末期の代理意思決定における看護師の役割意識とその関連要因

国際医療福祉大学保健医療学部看護学科 郷原志保
元国際医療福祉大学保健医療学部看護学科 須佐公子

背景

超高齢社会を迎えた今、老年期における医療は単に生命維持を優先するべきものではなく、その人の人生を尊重した治療や延命処置についての選択が問われている。特に高齢者の終末期医療においては、最期の時間をどのように過ごすか等、本人の意思を尊重したケアの提供が重要となっている。加齢や認知症の進行により自分の意思を伝えられない場合、家族や重要他者が患者本人に代わり治療や処置の決定をする代理意思決定する場面が多くある。患者の意思を推定し、治療や延命処置に関する決定を行うことは代理意思決定をする家族のみならず、それを支援する看護師も非常に困難感やストレスを感じる事が予測される。

目的

終末期の代理意思決定における看護師の役割意識とその関連要因を明らかにすることを目的とする。

方法

平成29年3月～5月 郵送法による自記式質問紙調査
WAMNETに登録されている全国の病院より無作為に抽出
調査協力の得られた病院の看護師343名に調査を依頼

調査内容

- ①対象者属性
 - ②意思決定支援役割意識（以下、役割意識） 「とても思う」～「全く思わない」を1～4の4件法
 - ③意思決定支援に対する困難感（以下、困難感）10項目 「全くない」～「非常にある」を1～4の4件法
 - ④代理意思決定に関する認識（以下、認識）10項 「非常にそう思う」～「全くそう思わない」を1～4の4件法
- なお、本研究は国際医療福祉大学倫理審査会の承認を得て実施した。（承認番号 16-10-178）

分析方法

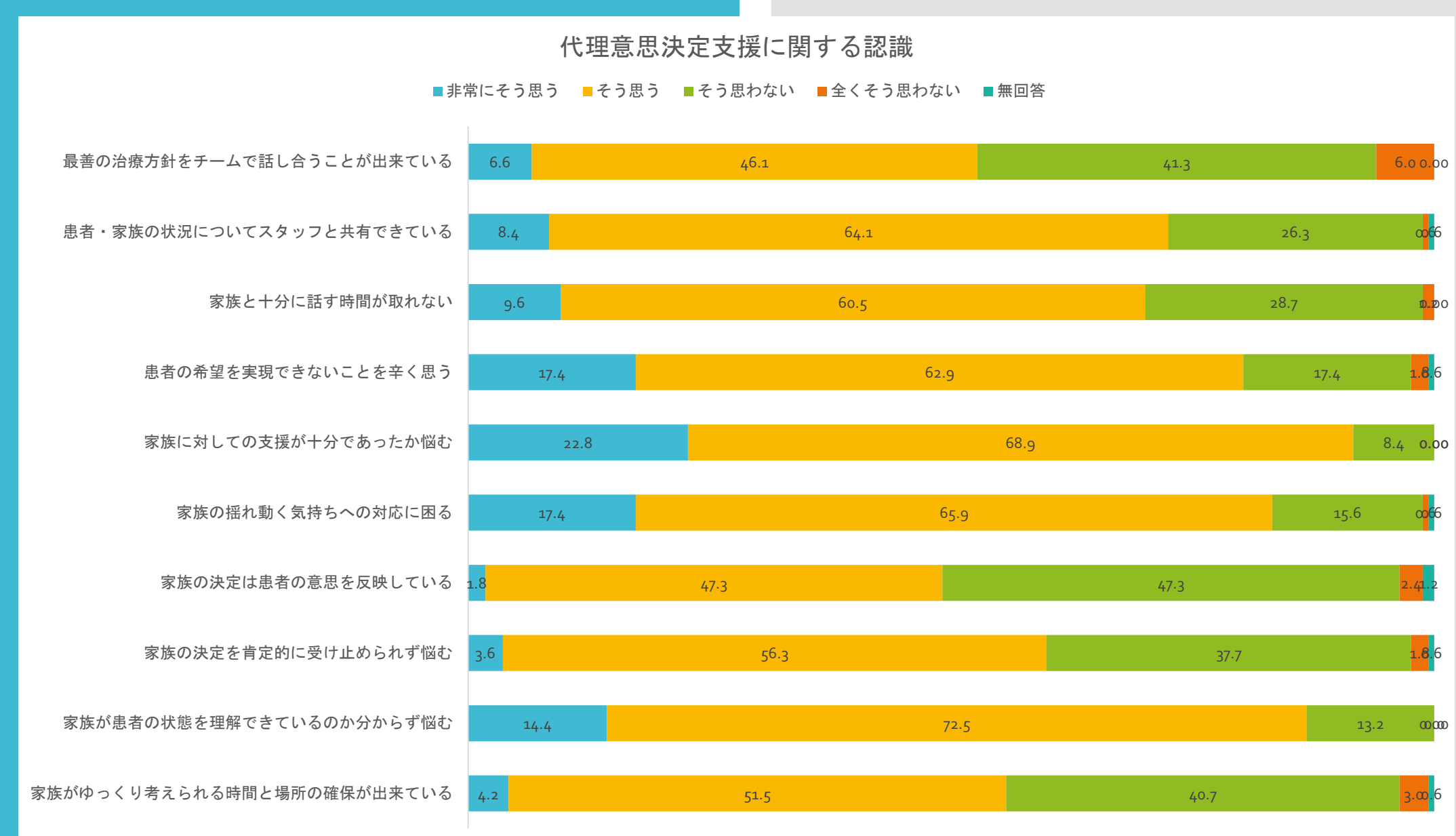
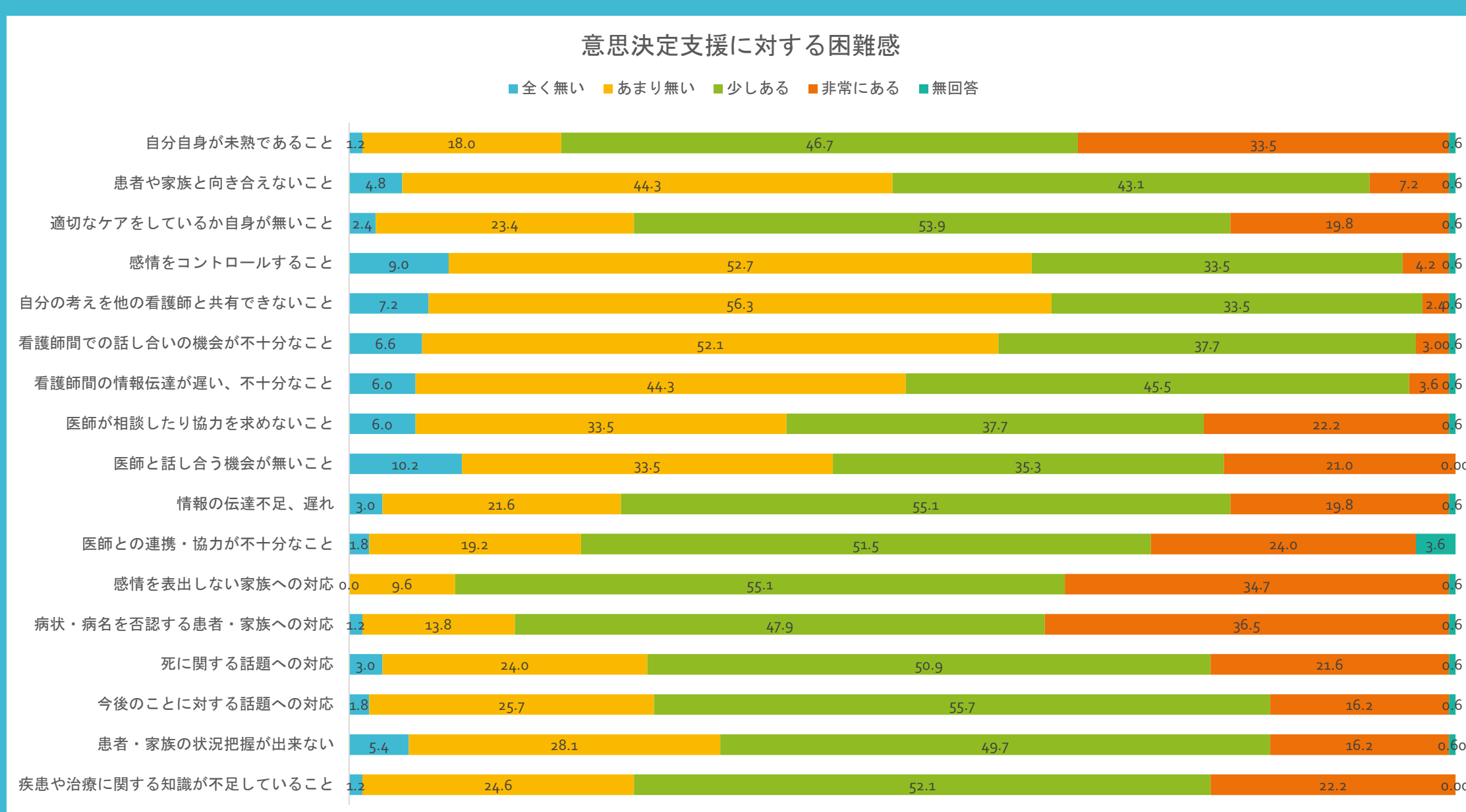
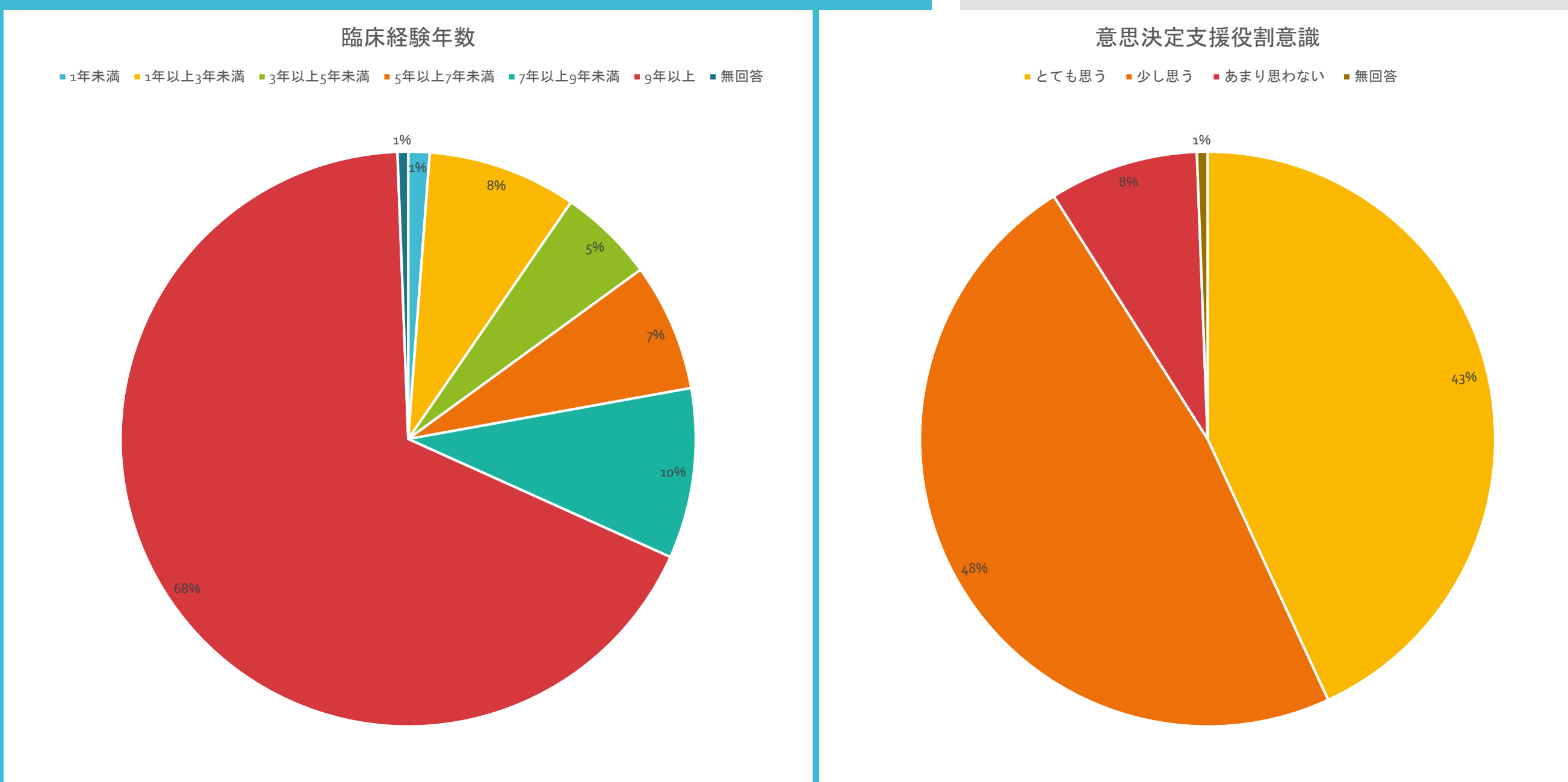
役割意識と対象者属性、困難感と認識をSpearmanの順位相関係数を用いて分析
分析にはSPSS Ver24を使用した。

結果

有効回答数167名。回収率48.7%
年齢39.0歳（31.25, 47.0）
男性7.8%、女性91.6%
所有資格 看護師95.2%、准看護師4.2%

		困難感
Spearmanの ロー	意思決定支援	相関係数 .181
	役割意識	有意確率(両側) 0.024
		度数 157

		認識
Spearmanの ロー	困難感	相関係数 -.512
		有意確率(両側) 0.000
		度数 156



考察

「認識」と「困難感」に負の相関が認められ、代理意思決定に関する認識の低い人ほど困難感が高まる事が示唆された。厚生労働省や学会等が提示するガイドライン等で示されている通り、人生の最終段階における医療の決定においては、本人の意思を最も重要としている。しかし、近年の急速な高齢化や認知症高齢者の増加により、医療の決定を家族が担う代理意思決定の場面が今後さらなる増加が見込まれている。代理意思決定は、患者本人の意思を十分に推測した上での決定であるかが重要であり、家族が代理決定した事項が看護師の専門的判断に基づく決定と一致しなかった場合、看護師はその決定内容を肯定的に受け止めることが出来ず、困難感を抱きやすいことが明らかとなった。

この結果の背景には、世帯構成員の変化による家族関係の希薄化や、多死社会を迎え、死生観やQOLに対する価値観の多様化が影響していると予測される。意思決定支援においては、患者がどのような価値観を持ち、どのような環境に身をおき、どのような嗜好、信念を持つのかを理解する必要がある。これらの情報を収集するためには、患者や家族との関係性を発展させ、信頼関係を構築することが重要である。しかし、入院期間の短縮化などにより患者・家族と信頼関係を構築するのに必要な十分な時間の確保が困難な状況にある中で、看護師は、意思決定を支援することへの困難感をより一層強める可能性があることが示唆された。

結果

1. 意思決定支援役割意識が高い人ほど意思決定支援に対する困難感が高い。
2. 代理意思決定支援に関する認識が低い人ほど意思決定支援に対する困難感が高い。